

いのちの葉

世界にひろがるお念仏

釋氏
眞澄

目次

カナダへ旅立つ日	4
ゴールドデン・チェイン	8
やわらかいこころ	12
浄土真宗とボランティア	16
日系人の足跡をたどる	20
愛別離苦を縁として	24
母ダコの一生	28
カナダで初めてのお葬式	32
雅楽 ―お浄土の響き―	36
少欲知足の生き方	40
アメリカン・ブディズム	44
世界にひろがるお念仏	48

カナダへ旅立つ日

いつでも帰ってきてええねんで

別れ際の母の言葉

私はかつて、カナダ開教区で開教使として海外伝道に携わっていました。

開教使になることは十八歳からの夢だったのですが、両親は反対をしていました。そして十三年後の二〇〇二（平成十四）年、カナダ行きが決まり、両親

との口論を覚悟して電話をした時、「ほんまによかったなあ！ 皆さんのためにしつかりがんばってきなさい！」と、最後には喜んでくれたのです。

いよいよトロントへ発つ日の朝、車で送ってくれるはずの父が私の重い荷物を運ぼうとして腰を痛めてしまい、代わりに母が空港まで運転してくれました。空港の搭乗者入り口での別れ際、カナダ伝道に生涯を捧げようとしていた私に向かつて母が、「つらかったらなあ、いつでも帰ってきてええねんで！」と泣きながら言いました。そして私の姿が見えなくなるまでいつまでも、涙で顔をくしゃくしゃにしながら手を振っていました。自分の息子の葬儀でさえ周りに心配をかけないようにと、涙を見せなかった母でした。私は見たことがないような母の姿に、必死に笑って手を振り返しました。そして母に背を向け足を早

めた瞬間：涙が堰を切ったようにあふれ出したのです。

「親さま」

カナダに行つてから、折に触れてところに浮かんたのは父と母の姿でした。離れてみて初めて、親の恩というものを深く思い、親孝行をしてこなかったことを反省するばかりでした。

一生懸命に開教使としての務めに励んでいましたが、六年が経ち、慣れない寒冷地での生活と仕事の忙しさに疲労が蓄積し、身体に不調を来してしまいました。そして、志半ばで帰国しました。生きる目的を失い、心身ともにボロボロな状態だった私を何も言わずにあたたかく迎え、支えてくれたのもまた両親

で、そのおかげで立ち直ることができました。そして四十歳を過ぎて結婚し、子どもを授かった私のそばで泣いて喜んでくれたのも両親でした。

浄土真宗では、阿弥陀さまのことを昔から「親さま」と呼び、親さまは、すべてのいのちをわが子のごとくそのまま受け入れ、どんな時もそばに寄り添い、ともに涙し喜んでくださっています。そして浄土といういのちの行き先を準備され、時に「親」に背を向け悲しませるような我々に向かって、「いつでもこちらにいらつしゃい」と、優しくよびかけ続けてくださっています。

慌ただしい生活の中、「親」への孝行も十分にできていないことを反省するばかりですが、いつでもあたたかく迎えてくれる「親」の存在のありがたさを思うと、あたたかな気持ちでいっぱいになります。